奏 SOU

Vol.52 Fall 2019

インタビュー：
大植英次（指揮者）
～14年目の大阪クラシック～

音楽の学び舎：相愛大学
中谷満

伝統あるコンクールと新しいコンクール
～ボルドーとハノイ～
渡辺 和

音楽文化の源：
くにさき総合文化センター

インタビュー

第十四回目を迎えた「大阪クラシック」。これからも参加する人々と共に成長していく。

大阪の街にクラシック音楽があふれる「大阪クラシック」は、二〇〇六年からスタートして今年で第十四回目を迎えることになりました。開催を目前に控えた九月六日、プロデューサーの大植英次さんと運営責任者の福山修さんに、それぞれの思いやこれまでの経緯などについてお伺いしました。

大阪クラシック2019

大植英次さん

聴けない人達にクラシック音楽を届けたかった。——大植

牧野　「大阪クラシック」を始めたきっかけをお聞かせ下さい。

大植　普段は聴けない人達にクラシック音楽を届けたいという思いからスタートしました。

福山修さん

牧野　聴けないというと？

大植　例えば、高齢者や小さいお子様がいるご夫婦は、聴きたくてもなかなかコンサートホールには行けない。そんな方々にクラシック音楽を届けたいと。クラシックは敷居が高い印象がありますから「格調は高く敷居は低く」というスタンスで誰もが参加できる音楽会を開催したいと。そんな思いを大阪フィルハーモニー交響楽団（※以後、大フィル）に話したら、すぐに賛同して下さって実現する運びに…。

牧野　当初の公演数はどれくらいだったのですか？

福山　五十公演です。

大植　今では八十公演となりました。「大阪クラシック」は、珍しい曲を取り入れるのが特長で、お客様には新たな発見となり、演奏者には刺激になります。こういう音楽会は非常に少ないんですよ。また、お客様が互いに譲り合って下さるので、会場の雰囲気が和やかなのも特長かな。

牧野　静かではなく、和やかというのはいいですね。

大植　ある音楽会で、小さな子がグズってお母様が退席されたんです。それを見て「あんな人にこそ来てもらいたい音楽会なのに…」と残念に思い、そんな気持ちをお客様に話したら、すぐに賛同いただけたんです。それから自然と譲り合って楽しんで下さるようになりましたね。

牧野　素晴らしいですね。

大植　今では演奏者もお客様もそうした趣旨を理解して下さっているので、非常に和やかな音楽会となりました。

大植さんの人柄に惹かれてファンになる方も。——福山

牧野　世界には様々なフェスティバルがありますが、街中でこんなにバラエティ豊かな音楽会が行われるのは珍しいのでは？

大植　そうですね。協賛各社、スタッフ、演奏者の協力で、大半が無料公演となっていますし…。

福山　通常フェスティバルは、スポンサーや企画制作会社の主導で進めますが、指揮者がプロデューサーで、演奏者それぞれが自主的に街に飛び出すというのは珍しいですね。そうしたことも「大阪クラシック」の大きな特色だと思います。

牧野　今までにないものを始めるのは大変だったのでは？

大植　それが幸運なことに、最初から比較的スムーズにスタートできました。会場も提供して下さる企業が多くて、恵まれていたと思います。

大植さん

牧野　今や千公演を超え、延べ六十万人近くもの来場者数（※二〇一八年までの総数）を記録したそうですが、大阪でこんなにもクラシック音楽が受け入れられると思われましたか？

大植　大阪でクラシック音楽は難しいとよく言われますが、私はそうは思いません。逆にこちらが難しいと構えると観客に伝わってしまって、楽しいものができなくなるのではないかな…。

福山　大植さんは、全公演に顔を出して積極的に観客に呼び掛けていました。「指揮者があんなこともするの？」と驚かれ、大植さんの人柄に惹かれてファンになる方も多かったです。

大植　事務局は通常のコンサートだけでも忙しいのに、本当に大変だったと思います。

福山　本当に大変でした（笑）。

大植　（笑）でも、世界中の都市に「音楽の日」を作ってきたから、大阪でも是非実現したかった。そこで、当時の大阪市長に、難波から市役所までの御堂筋で開催する音楽会の企画を持ち込んだんです。

牧野　關元市長ですね。

大植　そうです。そうしたら「大変素晴らしい！」とすぐに快諾いただけたんです。けれど、これまで私が実施した都市は人口百万から二百万人程度で、大阪は八百八十万人。だから「開催期間は一週間で」と依頼されたんです。これには驚きましたね。

福山　事務局としても嬉しいけれどスタッフが全然足りない。対応できる規模ではないと大植さんに話したのですが「市が共感してくれたのは素晴らしいことだから、どんな苦労があってもやり遂げよう」と…。

福山さん

大植　開催することで様々な企業との関係もできるし、大阪のクラシック界においても必ず良い影響があると感じたんです。

福山　とは言われても運営できる自信もないし、それ以前に一週間だと平日がほとんど。だから集客の不安も大きかったです。見込める集客数が掴めないから、スタッフの必要人数もわからない…。もう不安だらけで

聞き手
【牧野 立太】 日本室内楽振興財団 常務理事

撮影／大阪クラシック2019：飯島　隆
インタビュー：栗山　主税

【大植　英次】（指揮者・大阪フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者・大阪クラシックプロデューサー）
桐朋学園で齋藤秀雄氏に指揮を師事し、1978年渡米。タングルウッド・ミュージック・センター等で学び、レナード・バーンスタインの助手として世界各地の公演に同行する。以後ミネソタ管音楽監督、ハノーファー北ドイツ放送フィル首席指揮者などを経て、2003年大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督に就任し、2012年より桂冠指揮者。大阪芸術賞特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、ニーダーザクセン州功労勲章・一等功労章などを受賞。

【福山　修】（大阪フィルハーモニー交響楽団 演奏事業部長）
大阪音楽大学器楽科ホルン専攻卒業。1991年大阪フィルハーモニー交響楽団事務局に入り、演奏事業、広報、企画制作などに従事。初代音楽監督の朝比奈隆をはじめ、大植英次、井上道義、尾高忠明と続く歴代指揮者のもと、数多くのコンサートを担当、新しいプロジェクトの立案やオーケストラ運営に携わる。2005年演奏事業部長、2013年より事務局次長を兼務。

すよ(笑)。でも、いざ開催となると予想を遥かに上回る来場者数となって感激しました。

大植　どの会場も超満員で、大盛況だったね。

福山　大植さんは「大丈夫！必ず沢山お客様が来る」と言っていましたが、とてもそうは思えない。でも、結局、大植さんの言う通りになって驚きました。

大植　長蛇の列で、対応に大わらわだったね(笑)。

福山　行列が長すぎて地下鉄の階段にまで及ぶ会場もあって、喜んでいる暇もなく、ただただ対応に追われて必死でした(笑)。

全ての人が参加でき、成長できるイベント。――牧野

牧野　それにしても初回から好調な滑り出しですね。

大植　五十公演で約二万二千人の来場者数ですからね。

牧野　記録的な人数ですね！

大植　だから、大阪でもクラシック音楽は受け入れられるんです。

牧野　なるほど。

福山　二〇〇三年、大フィルの音楽監督の就任時「多くの人にクラシック音楽を楽しんでもらえるイベントがしたい」と宣言し、最初に取り組んだのが「音楽の日」の企画。大植さんは、その実現に向けて次々とユニークなアイデアを提案し続けて、多くの人々を魅了しました。おかげで「大阪クラシック」の立ち上げ時には大反響でしたね。

大植　ほぼ同時期に大阪城での野外コンサートも開催し、来場者数約二万四千人となって大成功！野外クラシックコンサートで一万人を超えるのは稀有なことだそうです。

牧野　素晴らしい功績ですね。

福山　当初三千人程度の来場者数を予想していたため、予想を大幅に上回る観客数にこれまた大慌てですよ(笑)。

大植　大阪人のクラシック音楽への情熱を感じました。その野外コンサートは二〇二二年に終了しましたが「大阪クラシック」は、まだまだ続きます(笑)。

福山　野外コンサートは天候に左右されやすく大変な部分も大きかった。「大阪クラシック」は、開催期間が一週間なので悪天候もあれば好天もあるし、何よりもお客様の都合に合わせて来場いただけるのが良いですね。

大植　最近は行きたい会場を選んでスケジュールを組む方も増えたそうです。

牧野　続けるうちに、お客様や演奏者が変化していくのを感じたりしますか？

大植　全体的に見ると、変化する方もいるし、ずっと同じ方もいますね(笑)。昨年、こんな面白いエピソードがありました。ある公演にご夫婦がお子様と一緒に訪ねて来られたんです。そのご夫婦は第一回目の「大阪クラシック」で出会って交際が始まり、ご結婚されたそうで「これがなければ結婚もなく、この子も生まれなかった」とご報告に来て下さったんです。それを聞いた時は本当に嬉しかったですね。

牧野　そんなロマンチックなエピソードもあるんですね。

大植　音楽は平和を作りますね。また、平和じゃなければ音楽を楽しむこともできないし…。

牧野　開催中、街のあらゆる場所にクラシック音楽があふれるのは、まさに平和の象徴ですね。

大植　最初は御堂筋だけでしたが、中之島や梅田駅にまで広がりました。あまり拡大し過ぎてもいけないけれど、街全体にクラシック音楽が根付いたような気もします。十四回続けてきたことで、九月の風物詩にもなってきたのではないかな。

福山　大植さんはいつも、このイベントは自分とメンバーだけじゃなく、お客様も一緒に作って下さっているとおっしゃいます。当初は数人のアルバイトとボランティアスタッフだけの運営なのに、予想を遥かに上回る来場者数があった。それでも、事故なくスムーズに開催できたのは、お客様自身が節度ある行動をとってくださったお陰だと。私自身もお客様同士の協力のお陰だと感じています。

牧野　全ての人が協力し合って楽しめるイベントなんですね。

大植　関わる人達全員がフェスティバルを作り上げるという意識が高いのかもしれない。だから、演奏者・スタッフ・観客の間に壁がないんですね。

「大阪クラシック」は、聴くというより〝会う〟感覚。――大植

牧野　ところで「大阪クラシック」において、オーケストラはどんな立ち位置なのでしょう？

大植　最終公演であるオーケストラの演奏は、集大成となって特別な高揚感で満たされます。ずっとアンサンブル演奏をしてきた人達が最終的にオーケストラとなると、素晴らしい盛り上がりを見せてくれますね。

福山　ある種、衝撃的な演奏になります。

牧野　オーケストラをはじめ、それぞれの音楽会の企画は、誰が考えるのですか？

福山　総合プロデュースは大植さんですが、基本は各々の演奏者に任せて自由に選曲してもらいます。ですから、時々、同曲の演奏があることも。でも、それも面白さの一つだと認めています。

大植　曲が同じでも場所や演奏者が違うと、また違うものになる。それを聴き比べるのも面白いでしょ。

牧野　室内楽の場合、お客様と演奏者の距離が近いため、その場にいる人達の気配によって雰囲気が変わりますよね。

大植　そうですね。一般の演奏会はステージと客席に距離感がありますが、「大阪クラシック」は、聴くというより〝会う〟と言っても良いのかもしれない(笑)。演奏前、演奏者自ら曲説明をするのですが、その時にキャラクターも出るし、終了後のサイン会でもちょっとした交流ができる。だから、自然と演奏者とお客様が近くなるわけです。

牧野　素敵ですね。ステージを眺めながら聴くのとは違った関係性が生まれますね。

福山　またパンフレットに自分の名前が載ることで、それぞれの演奏者が自分の演奏会だと自覚できるし、会場でお客様から「最後の演奏会にも行くからね」と言ってもらえると「自分のお客様が来て下さる」と意識します。そんな意識が集結するせいか、最後のオーケストラ公演は毎回盛り上がりますね。

牧野　徐々に演奏者とお客様の間に良い関係性ができ、最後には全ての人が一体となって盛り上がるのですね。

福山　自分の顔と名前を覚えて下さるお客様がいるのは張り合いになると思います。だからこそ、自然と力が入るのでしょう。

牧野　室内楽を実践しながら、自然とオーケストラを育てているのかもしれませんね。

福山　そうですね。共に意識を高めながら、自然に育っていくのだと思います。

牧野　理想的な相乗効果ですね。

福山　オーケストラでは、トップ奏者とトゥッティ奏者で、それぞれ違う役割がありますが、「大阪クラシック」では、全員がトップ奏者という意識がありますね。

大植　だからこそ、素晴らしい演奏が生まれるんですよ。

裏方がお客様から激励いただけるのは珍しい。――福山

牧野　華やかなイベントを支える裏方としては、様々なご苦労もあったのではないですか？

福山　山のようにあります(笑)。今はスタッフも増えて少し落ち着きましたが、当初は譜面台やピアノの椅子なども

大阪クラシック2019

担いで地下鉄で往復していましたから、もうそれだけでヘトヘトですよ（笑）。ただ、そうした姿はお客様も目にされて「大変ね～」とか「頑張ってね」などと、よく声をかけて下さいました。裏方がお客様から激励いただけるのは珍しいですし、苦労以上に大きな喜びとなって頑張れましたね。

大植　一般のコンサートだと目にしない裏方の動きが目に入る。そうするとお客様も「こんなふうに頑張っているんだ」と理解して下さるのがいいですよね。

牧野　事務局とお客様の距離も近いということですね。

福山　大植さんは必ず最後にスタッフ紹介をして下さるのですが、お客様も裏方の動きを見ているため、心から労って下さいます。そうしたことはやはり嬉しいですし、頑張ったかいがあったと大きな達成感を覚えます。

牧野　オーケストラのコンサートには行きにくくても、街で演奏されている室内楽だとクラシックになじみがなくても参加しやすいですよね。

大植　少しでも多くの方々がクラシック音楽を身近に感じて下されば嬉しいですね。来年はベートーヴェン生誕二百五十年なので、ベートーヴェンに関するコンサートやイベントが各地で開催されると思うので、少し先取りして今回の「大阪クラシック」にも数曲取り入れました。

牧野　そんなお楽しみ的要素があればより親しみやすいですね。

大植　お客様が笑顔で参加して下さるのが一番ですからね。昨年はブラームスで今年はベートーヴェンというように、毎年曲も変えますから、どんなにキャリアがある演奏者も一から練習をします。だから、全員が新鮮な気持ちで取り組めるんです。

牧野　そんな独自の楽しさが伝わって、大フィルだけでなく、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、日本センチュリー交響楽団、オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラと参加する団体が増えたのでしょうね。

福山　そうですね。どんどん広がって、能楽とコラボレーションしてみたり、中高校生のブラスバンドに出演してもらったりと、様々な試みがなされるようになりました。今後もいろいろな展開があると思いますね。

大植　最初はしっかりと地固めするために大フィルだけでしたが、根付いてきたと感じたあたりから、場所を変えたり、参加団体を増やしたり、コラボレーションを取り入れるようになりました。イベントそのものをどんどん高めるには、上ばかり目指すのではなく、下の根の部分を安定させなくてはならないと思います。

牧野　根の部分がしっかりしないと、上に伸びても不安定だということですね。

大植　根の部分に栄養を与えて大切に育てると、素晴らしいイベントになると実感しました。

福山　最初の六年間は大フィルだけで、七年目から三つのオーケストラが参加し、最後にオオサカ・シオン・ウインド・オーケストラが参加しました。大フィルの中で芯を作っても、新参加者との間に壁を作るのではなく、共に次のステップへと進み、全員で成長したいと思います。

大植　とにかく、音楽の原点である室内楽で多様な音楽会ができるのは、全ての面に良い影響を与えると思います。これを続けるのが私の使命だと思いますが、私が中心になって指導するというのではなくて、あくまでも基本は演奏者に委ね、全体のバランスを整えるのが私の役目。細かいことに私が口出ししていたら十四回も続かなかったと思います。演奏者、スタッフ、ボランティアが一丸となって協力する姿を、あくまでも見守りたいと思っています。

牧野　大植さんと関係者が、素晴らしい信頼関係で結ばれているように感じますね。

大植　もちろん、オープニングや最後の挨拶は私がしますが（笑）、後は皆さんにお任せです。

牧野　指揮者の大植英次とプロデューサーの大植英次は違うということですね。

大植　プロデューサーは影の立役者だというのが、私の持論なんです。最初の企画は発案してベースは作るけれど、後は任せる。そうすると、様々な人の力が化学反応を起こし、予想を超えた素晴らしいものとなる。今回の能楽も、私は詳しくないからノータッチですよ（笑）。

牧野・福山

牧野　（笑）。

牧野　だからこそ、面白い試みが生まれ、さらに魅力的な企画へと昇華していくんですね。

大植　先日、能楽師の大槻文藏氏（観世流シテ方）と話しましたが、そうした体験がまた刺激となって新しい発想が生まれます。

唯一無二の「大阪クラシック」。今後の成長が楽しみ。――牧野

牧野　大植さんは世界中で様々なフェスティバルや音楽会の指揮をされていますが「大阪クラシック」のユニークな部分はどこだと思いますか？

大植　「大阪クラシック」そのものがユニークなんです。多くの企業が協賛し、無料で場所を提供して積極的に盛り上げようと考えています。そんな意識の高いイベントは、世界的にも珍しいのではないかな。

福山　変な狙いがないというか、こういうテーマでこんな演奏と決めずに、あくまでも演奏者の自由な発想で演奏する曲を、お客様が好きなように楽しむ…。そんな"音楽の場"は、あまりないですよね。自然に任せて成り立つ音楽会というのは非常に珍しいケースだと思います。

大植　そんな音楽会は、狙ってできるものではなく、演奏者、裏で支えるスタッフ、そして聴いて下さるお客様が一体となって作り上げる賜物です。だからこそ「大阪クラシック」はオリジナルで、他と比べようがない。一週間で七十八回も室内楽が聴けるのも、世界的に珍しいと思います。

牧野　唯一無二の「大阪クラシック」。今後の成長も楽しみです。

大植　有難うございます。先のことはわかりませんが（笑）、わからないからこそ面白いのだと思います。果たしてどうなっていくのか、それを演奏者やお客様と共に見てみたい。関わる全ての人によって「大阪クラシック」の未来は開拓されていくのです。

牧野　格調高く敷居は低い「大阪クラシック」の予測不能な成長を楽しみにしております。本日はお忙しい中、貴重なお話を有難うございました。

「大阪クラシック」とは…

二〇〇六年からはじまった初秋の大阪を彩るクラシック音楽の祭典。大フィルの桂冠指揮者・大植英次氏のプロデュースにより、大阪のメインストリートである御堂筋と、水の都大阪を象徴する中之島エリアを中心に、オフィスビルのロビーやカフェ、ホテルなど、様々な会場で一週間に渡って開催されます。

昨年までの十三年間で二千四十一公演を行い、五十六万人を超えるお客様にご来場いただきました。ほとんどが無料公演であるため、普段クラシック音楽に触れる機会が少ない方でも気軽に楽しめる音楽イベントです。

大植英次指揮・大阪フィルハーモニー交響楽団 予定

2019年
- **10月30日**(水) 14:00　**マチネ・シンフォニーVol.22**
  会場：ザ・シンフォニーホール
- **11月2日**(土) 16:00　**刈谷公演**
  会場：刈谷市総合文化センター

2020年
- **1月25日**(土) 15:00　**「英雄の生涯」**
  会場：ザ・シンフォニーホール

音楽の学び舎

相愛大学

相愛大学音楽学部　教授
中谷　満

［中谷 満（なかたに みつる）プロフィール］
一九七三年京都市立芸術大学音楽学部打楽器科卒業。同年大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。一九七七年より一年間、旧西ドイツ国立芸術大学に留学し、ベルリンフィル首席ティンパニ奏者W.テーリヘン氏、国立ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団首席打楽器奏者K.キスナー氏に師事。ベルリン放送管弦楽団、ベルリンドイツオペラ管弦楽団などに出演。帰国後大阪フィルに復団し、一九九一年からはパーカッションアンサンブル「シュレーゲル」を主宰するなどオーケストラでの演奏の他、数多くの室内楽や協奏曲の演奏を行う。二〇〇八年退団し、相愛大学音楽学部教授に就任。二〇〇年より相愛オーケストラ委員長を勤める。二〇八年滋賀県文化賞受賞。

相愛大学音楽学部、相愛オーケストラの伝統

相愛大学キャンパス

相愛学園の音楽専門教育の歴史は、明治三十九年『相愛女子音楽学校』の開設に始まります。昭和十二年には『女子専門学校音楽科』が山田耕筰先生を中心に設立され、ドイツからシュナイダー先生を招聘して、当時関西においては注目を集めました。しかし戦争で空襲にあい、本町校舎はすべて焼失してしまいます。

終戦後、教育制度の改革に伴い女専は昭和二十八年『相愛女子短期大学音楽科』として発足、あわせて『相愛高等学校音楽科』も開設され、短大に接続して教育機構の強化がはかられました。また昭和三十年には短大音楽科、初代学部長にあらためて山田耕筰先生を迎えています。

相愛が復興、拡充に必死になっている頃、東京では井口基成、伊藤武雄、齋藤秀雄、吉田秀和の各先生方による『桐朋学園子供のための音楽教室』が着々と成果をあげていました。これに山田耕筰先生も注目され上記の四人の先生方のほかに、井口愛子、池内友次郎、柴田睦陸、鷲見三郎、團伊玖磨、山田真梨子先生など日本を代表する教授陣を迎えて教育内容もより充実しました。そしてぜひ大阪にも音楽の早期教育の教室を、と昭和三十年十月いよいよ『相愛学園子供の音楽教室』が誕生します。短大が大学に移行する二年半前のことです。

『相愛学園子供の音楽教室』は井口基成、伊藤武雄、齋藤秀雄、吉田秀和の諸先生を中心に、広く関西二円の優れた音楽家たちの協力を得て、総勢七十～八十名の教師陣でスタートしました。生徒たちは、遠くは神戸以西、奈良、和歌山方面からも集まり、

山田耕筰の授業風景（昭和14年）

オーケストラやコーラスの授業は開設後二～三年しないと無理と考えられていたのが、わずか半一年で開始することが出来ました。これが現在の相愛オーケストラの母体となります。

相愛オーケストラは一九五六年に創設。サイトウ・キネン・オーケストラにその名をとどめる名教育者、故斎藤秀雄教授の薫陶を受け、現在もその独自の指導法を継承しています。相愛オーケストラは五つのオーケストラで構成されています。①相愛大学生及び相愛高校音楽科生による大編成の管弦楽「相愛シンフォニーオーケストラ」、②相愛大学音楽学部弦楽器専攻生による「相愛ストリングオーケストラ」、③小学生から高校生による弦楽器を主体とする「相愛ジュニアオーケストラ」、④そして相愛大学音楽学部管打楽器専攻生による「相愛ウィンドオーケストラ」と二〇八年四月に相愛大学大学院音楽研究科（修士課程）が設置されたことを機に、⑤専任教員や、講師、大学院生を常設メンバーとする「相愛フィルハーモニア」で構成されています。「相愛フィルハーモニア」は大学院音楽研究科の教育機関に位置付け、時代に即した音楽教育の拠点として独自の発展を目指しています。

相愛オーケストラは現在総勢約三百名を擁するまでに発展

してきました。毎年秋にはザ・シンフォニーホールにて、また春にはいずみホールにて定期演奏会を華やかに開催しています。

指揮者陣にはイギリスでエリザベス女王より大英勲章を授けられ、現在大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督である尾高忠明客員教授をはじめ、円光寺雅彦、梅田俊明、小林恵子の諸氏が名を列ねています。

これまで、関西圏はもちろん沖縄や中国、四国、東海、北陸に至る各地で演奏旅行を行ったほか、海外へも「相愛ジュニアオーケストラヨーロッパ演奏旅行」を三度にわたり敢行、訪れたロシア、ポーランド、ドイツ、イタリア、いずれの地においても絶賛を博しました。二〇〇八年には相愛学園創立百二十周年を記念し「相愛オーケストラヨーロッパ公演」をデュッセルドルフ、ワルシャワ、ミラノ各都市にて、また二〇一〇年には中国・瀋陽にて公演を行い、いずれも絶大な賞賛を得ています。二〇三年には、第六十回定期演奏会を迎え、相愛学園の総力を結集した「第九」を演奏し、幅広い層から絶賛されました。

二〇一四年には大阪での定期演奏会を含めた、福岡・広島・岡山の各地を巡る「相愛オーケストラ西日本ツアー」、二〇一五年七月には「相愛ジュニアオーケストライタリア演奏旅行」、二〇一七年、二〇一八年には「相愛ジュニアオーケストラ淡路島公演」を行い、いずれも好評を博しました。

相愛オーケストラの練習形態は斎藤秀雄先生の教えである、個人の自主練習は勿論の事、カルテット分奏、細分奏、管打分奏、弦分奏、そして合奏。指揮者が行う合奏や集中練習迄に、各専攻の担当教授や講師が其々の分奏の指導を担当します。秋の定期公演の演目を夏の合宿（四泊五日）を含む半年間、一曲を掘り下げ、繰り返し研究を続ける事により、その曲の真髄に迫り、楽員全体がその音楽感を共有するまで練習を重ねます。

各オーケストラの練習回数は新学期より秋の定期演奏会まで、前期の授業として、十五回、四泊五日の夏休み中の合宿、後期の五回～七回の授業と秋季定期演奏会事前の指揮者を迎えての三日間の集中練習（十三時～十八時）を経て本番を行います。

「相愛ストリングオーケストラ」は毎週金曜日の十一時～十二時三十分まで、「相愛シンフォニーオーケストラ」は毎週金曜の十五時～十八時まで、「相愛ウインドオーケストラ」は毎週月曜日の十五時～十八時まで「相愛ジュニアオーケストラ」は毎週土曜日の十七時四十五分～二十時まで行います。相愛オーケストラでは毎回の授業や集中練習時の練習形態を、都度、相愛オーケストラ実行委員会を行い、一ヶ月前には詳細の練習計画を立て、練習形態（分奏、合奏、自主練習、カルテット分奏）と担当教官、練習部屋、などを学生インペクに伝え掲示します。指揮者の選定や計画を実行委員会にて相愛オーケストラ委員長を中心に委員や各オーケストラ長とまとめます。

相愛オーケストラの慣例行事でもある、オーケストラ合宿は現在は滋賀県北小松の施設で行なっています。毎日七時朝食、七時三十分ラジオ体操、九時～十二時練習。十二時昼食。十三時～十五時昼寝。十五時～十八時練習。十八時三十分夕食。二十時～二十一時三十分練習。二十三時消灯。最終日は指揮者を囲み大盛り上がりの打ち上げを行います。合宿は寝食を共にする事により、指揮者、教師や仲間との絆が深まり、日々の練習が更に円滑に進み、信頼感や、ファミリーとしての意識の深まり、演奏にも反映します。

相愛オーケストラでは、演奏家としての基礎と、将来プロのオーケストラに所属した時、プロオーケストラに対応できるよう全力で指導しています。プロのオーケストラでは演奏会に向け数回の合奏のみで演奏会を行います、その短期間での合奏での指揮者の要望や、先輩プレイヤーとのアンサンブルや、音楽的コミニケーションが出来るよう、一曲を永き時間と、回数をかけ、丁寧に多くの教官と共に分析し、実践が出来るよう授業を組み立てています。

現在、関西や日本、世界のプロオーケストラや室内楽で多くの卒業生が活躍しています。相愛大学では、国内でのクラシックや、オーケストラ界の益々発展に貢献出来る教育機関になるべく、日々の創意工夫を欠かさず、山田耕筰先生や斎藤先生の一念に応えられるよう精進しています。「斎藤秀雄先生が創られたこのオーケストラ教育プログラムを実践しているのは、相愛だけになってしまった」この言葉は第七十回定期演奏会（二〇一八年）の終了後に尾高忠明客員教授は観客を前に述べられた言葉です。相愛オーケストラは相愛学園百三十年の歴史と伝統を脈々と受け継いでいます。

伝統あるコンクール・新しいコンクール

～ボルドーとハノイ～

音楽ジャーナリスト
渡辺　和

この夏も世界各地で国際室内楽コンクールが開催されている。フランス文化圏ながら遠く離れたふたつの都市、ボルドーとハノイの大会を眺めてみよう。コンクールがどこから来てどこに行くのか、あらためて考えさせられる対照的な事例である。

◆コンクールの向こうへ
～ボルドーの場合

一九七七年にジュネーヴ湖畔エヴィアンのカジノを会場に始まった国際弦楽四重奏コンクールは、旧西側で最も歴史のある専門大会だ。一九九九年にボルドーに移ってからも八回を重ね、去る六月四日から十二日に三年ぶり同地で九回目となる国際大会が開催された。公式表記はConcours Internatioal de Quatuor a Cordes、堂々たる「コンクール」である。

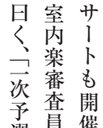
だがこの大会、常識を覆すイベントだった。なにしろ、参加団体を公募しなかったのである。参加六団体は、欧米主要大会ファイナリストやコンクール非開催年にボルドーで行うセミナー参加団体から、監督アラン・ムニエや国際コンサルタントのフランチェスカ・ジニら事務局が選抜、参加を要請した。夏の全国甲子園大会が、春のセンバツになったようなものである。ジニ女史は、「どうしても参加して貰いたくて何度も足を運んでも、ダメだった団体もありました」と苦笑する。

ボルドーコンクール表彰式

大阪、バンフ、メルボルンなど欧米からの遠隔地で開催されるメイジャー大会は、渡航費を主催側が負担や援助する。だが欧州の大会は参加団体自己負担が基本だ。今回のボルドーの参加団体は、渡航費と滞在費を事務局が負担した招待選手である。そうして集めた若者が一度弾いて帰る筈もない。全団体は、ボルドー市郊外の公立劇場で二回、市中央に聳える観光名所たる大劇場で一回、異なるプログラム各九十分のコンサートを行う。内容は自由でプレトークもOKだ。若手優秀団体に拠る十八回の無料コンサートが九日間繰り広げられる、ボルドー市民には夢のような弦楽四重奏フェスティバルである。

無論、審査はある。六名の審査員のうち演奏家は、委員長の長老チェロ奏者ムニエ、ディオティマQ（クァルテット）のシェヴァリエ、ジニ女史が前職のボルチアーニ大会時代から信頼するイタリア人ピアニストのジョヴァンニ・ビエッティ。残り半数は、パリ・フィルハーモニー監督オンドレ、エルプ・フィルハーモニーのキャシー・ウィルキンソン、そしてリンカーンセンター室内楽協会カリー・フィッシャー。半分は著名ホールのプログラム責任者なのである。「若く優秀な団体がプロのキャリアを積むためには、コンクール優勝のタイトルだけでは足りません。私たちのコンクールの目的は、その団体が必要なものを見定め、提供出来るものを提供すること（ジニ）」

順位がない結果は、以下。実質上のグランプリたる国際ツアー賞はマルメンQとシンプリーQが分ける。賞金€四千はカリストQ、€三千とフランス国内での演奏会はチャリックQ。チャリックQにはボルドーのデザイナーが衣装を提供する賞も。メディア対応コンサルタント、写真撮影など広報活動強化のための賞は全てシンプリーQ。ヴェローナQ（大阪三位入賞時ヴァスムスQ）の特別デザインストール授与は、参加記念賞か。既に完成された団体のアリスQだけが授賞なしだったのは、今回のボルドーの在り方を象徴するようだった。セッション開始前から、審査委員長ムニエは「これが私がやりたかったコンクールです」と満面の笑みを浮かべる。一方で、次回もこのやり方を踏襲出来るか判らない、と冷静な顔も。


ボルドーコンクール　マルメンQ

ちなみにボルドー大会、今回の改革のために国際コンクール連盟を脱会したという。賛否はあろうが、コンクールの在り方に問題を提起したことは確かである。

◆コンクールで関心を喚起
～ハノイの場合

今や東南アジア一の経済発展を謳歌するヴェトナムにも、仏植民地時代の移入からソ連流英才教育時代、南北統一後と、複雑に層を成すクラシック音楽の伝統がある。北爆下に紙鍵盤でピアノを練習したダン・タイソンを筆頭に、スター独奏者もいる。だが、音楽教育の主眼は独奏者とオーケストラ奏者育成。室内楽は関心の低いジャンルだった。

去る八月五日から九日、ハノイのヴェトナム国立音楽院（VNAM）で国際音楽コンクールが開催された。運営の中心となったVNAM演奏部副主任ブイ・コン・ズイ教授に拠れば、「ヴェトナムのクラシック音楽発展の六十年の歴史で最初にして最大規模の国際コンクールで、十九カ国六十三名の参加者、十一カ国十六名の審査員を招きました」。興味深いことに、この大会にはヴァイオリン独奏部門と共にピアノ付き室内楽部門が設けられた。後者は、インドシナ半島初の国際規模の室内楽コンクールであろう。

ハノイコンクール

室内楽部門の目的はヴェトナム国立音楽院に室内楽への関心を高めること。ズイ教授の準備は周到だ。昨年暮れに「大学の世界展開力強化事業」としてハノイで開催されたVNAMと東京藝術大学との五日間の室内楽で、藝大教授松原勝也やゼッパール・トリオのピアノの村田千佳、室内楽専攻大学院生選抜四名らとVNAM初の室内楽セミナーを行った。今回の室内楽部門には、そのセッションに加わった音楽家ら五名も含まれている。十二年前にハノイで初の本格的室内楽を興したというヴァイオリニストも参加。演奏人口の多いピアノを編成に含めたことも成功し、前回大阪三位のユリシーズQ以下、ヴェトナム人奏者のみから成る七団体を含む十一団体が参加。目的は達せられたと言えよう。

ハノイコンクール審査員

結果は、ピアノ二重奏で参加した極めて技術水準の高い韓国の姉妹デュオと、ダン・タイソンの弟子グェン・ヴィエト・トゥンとユリシーズQのピアノ五重奏が、順当にグランプリを獲得。副賞にハロン湾クルーズがあり、豪華客船の上で受賞者コンサートも開催されたという。室内楽審査員に招かれた村田曰く、「二次予選は極端なレベルもありましたが、予想していたより高かったのが素直な印象です。十二月に藝大とのコラボで参加した皆さんは成長著しかったです。特に、室内楽部門三位となった地元のエスポア・ピアノ三重奏団は、演奏を聴いて感動しました」

勃興期の猛烈なエネルギーに溢れた大会に聴衆の関心も高く、会場はほぼ満員。審査は全てライブストリーミングされ、ベトナム国営放送も取材に訪れた。日本からは審査員の村田と指揮者本名徹二の他、ヴァイオリン部門に二名が参加している。なお、スポンサーに加わったヤマハがホーチミン市からコンサートグランドを運び調律師付きで提供、コンクールを影で支えた事実は、日本のアジア文化交流の在り方として特記しておきたい。

第十三回バンフ国際弦楽四重奏コンクールレポート

大阪コンクール参加団体が一位をダブル受賞！

日本室内楽振興財団
プロデューサー
河井　拓

八月二十六日から九月二日まで、十三回目のバンフ国際弦楽四重奏コンクールが開催された。参加十団体中四団体は大阪のコンクール経験者であり、その内マルメン・クァルテット（以下Q）とヴィアノQが一位を受賞した。バンフでは初の二位ダブル受賞であり、ヨーロッパ拠点の団体が優勝を獲得するのも初めての事である。

ヴィアノQ：大阪と同じく、ヴァイオリンは曲ごとに交代して演奏。
全てのラウンドで丁寧で爽やかな演奏を聴かせた。

カナダ西部のカナディアンロッキー山脈に囲まれたバンフの街では、八十五年以上の歴史を誇る文化施設バンフセンターによって、音楽、演劇、フィルムなどの数々の文化イベントも開催されている。バンフ国際弦楽四重奏コンクールは一九八三年から開催され、入賞団体に与えられるキャリア支援の充実によって、世界的に知名度を上げてきた。また、コンクール会場を埋める聴衆には北米の室内楽コンサートの主催者も多く、入賞に至らなくても彼らのお眼鏡にかなえばコンサート契約を獲得することが出来る場所として、世界中の弦楽四重奏の憧れのコンクールとなっている。参加団体の演奏レベルは高く、今回もロンドン、メルボルン、ボルドー、イタリア、アメリカなどのコンクール上位入賞団体が集まり、第九回大阪コンクールからも二位のユリシーズQと三位のヴィアノQだけでなく、マルメンQとエリオットQも参加し、大阪同窓会の様な雰囲気もあった。

バンフではラウンドごとに演奏団体が減るのではなく、「ハイドンと近現代作品」、「ロマン派作品」、「委嘱新作」、「シューベルトとアドリブ」の四ラウンドを全団体が演奏する。弦楽四重奏として多面的に演奏を披露した後に、審査員はファイナルに三団体を選出するというプロセスだ。数十時間にも亘る演奏を聴いて審査員が選出したファイナリストは、カリストQ（アメリカ）、ヴィアノ（アメリカ、カナダ）、マルメン（イギリス）の三団体だった。

ファイナルは弦楽四重奏にとって聖典ともいえるベートーヴェンの作品を演奏。壮年期のエネルギーの塊のような中期作品を、カリストとヴィアノが洗練された技術で熱気あふれる演奏を聴かせる一方、マルメンは研ぎ澄まされた美音と豊かな洞察力で、音楽史上の天才の底見えぬ内面を覗き込むような作品一三一を描き切る。

結果はカリストが二位、そしてマルメンとヴィアノの両団体が一位という結果だった（なおハイドン特別賞はマルメン、委嘱新作特別賞はマルメンとヴィアノが受賞）。初めての同率一位ということで、世界ツアーやレジデンス機会はこれから割り振られる。

マルメンQ：ヨーロッパと北米のコンクールで優勝し、
今後は世界中で活躍が期待される。
2020年6月に来日予定。

大阪を経た二団体がバンフで優勝したことは、同じ室内楽コンクールとしても名誉あることだろう。マルメンは先立つボルドーコンクールのグランプリとして、二〇二〇年六月に日本ツアーも決まっている。世界に認められたサウンドを是非体験して欲しい。

音楽文化の源

くにさき総合文化センター アストくにさき

国東市教育委員会　社会教育課 主任　松原　知晃

アストくにさきは、文化センター・中央公民館・図書館からなる複合施設で、大分県国東市の文化交流拠点として、平成13年7月に開館いたしました。「アスト（明日人）には、21世紀のくにさきの担い手を育てる施設」という思いを込め命名しています。

当館は、音楽・演劇・芸能など多様な文化事業を展開する大ホール（735席）をメインに、多目的に使えるマルチホールや会議室、和室、スタジオなどで構成されています。

くにさき総合文化センター

大分県国東市国東町鶴川160-2
問い合わせ：国東市社会教育課　0978-72-2121

アストくにさき外観

■会館で行っている事業内容・今後の計画など

年間の主催事業は七件～十件程度開催しています。音楽では、平成二十八年度に市制十周年記念として、世界的に有名な指揮者である西本智実さんとイルミナートフィルハーモニーオーケストラを招聘し公開リハーサルとコンサートを開催いたしました。公開リハーサルでは市内の中学生を招待し、芸術文化に触れる機会を提供させていただきました。コンサートでは廉価で迫力あるダイナミックな演奏をお客様にお届けする事が出来、お客様の満足度は大変高かったと感じています。

演劇では、平成二十七年度に結成した国東演劇講座の発表公演を青年座映画放送（株）協力のもと毎年行っております。最初の公演は、国東市の偉人、ベトロ・カスイ岐部神父の奇跡と言われる生涯を演劇にし、好評を博しました。今年度の公演では、演者だけでなく脚本・照明・音響などの裏方も演劇講座生が勤め、より市民劇団として発展出来たと思っております。演劇講座生については、随時募集しておりますので、興味のある方は国東市教育委員会社会教育課までご連絡ください。

芸能では、毎年、芸能人によるトークショーなどを開催しています。樹木希林さんや草刈正雄さんに来て頂いたときは、映画上映後に普段聞くことの出来ない撮影秘話などを語っていただき会場を盛り上げていただきました。また、平成二十九年度には、くにさきアニカルトークライブと称し、地元出身の声優による講演や人気声優である梶裕貴さんや野上翔さんによるトークショーの開催など、若い世代に向けたイベントも企画し、市外・県外からもたくさんの方が国東市に訪れ、国東市のPRに繋がったと思っております。

そして、グランプリ・コンサートについては、平成二十九年度の弦楽四重奏「アイズリ・クァルテット」から毎年開催しており、今年で三回目の開催となります。気軽に室内楽の楽しさと奥深さを知っていただきたいという思いもあり、良質なコンサートを毎回無料で開催しています。また、演奏者の方々は、三年毎に行われる「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」において第一位を獲得した団体となりますので、演奏技術はもちろんのこと人柄についてもとても気さくで、毎年お会いするのを楽しみにしております。今後とも、継続的に開催したいと考えております。

現在、アストくにさきは、開館から十八年目を迎え施設・設備の老朽化が目立ってきました。特に舞台特殊設備（吊物・音響・照明）については、改修費用が高価であるものの公演に必要不可欠な設備であるため、今後、計画的な改修が必要であると考えています。アストくにさきは、国東市の文化交流拠点として必要な施設です。長寿命化を図ることで、人の賑わう施設として運営していきたいと考えています。そのために、今後もグランプリ・コンサートをはじめとしたコンサート、演劇、トークショーはもちろん、定期的な市民参加型ライブ等も企画していきたいと考えております。また、ホールの使用料は、同規模のホールに比べて廉価に設定しています。コンサートのリハ等での使用も可能ですので、たくさんの方のご利用をお待ちしております。

音楽随想

競合と向上心、発展とは何か？

© Katsuhiro ICHIKAWA

チェリスト
ヘーデンボルク・直樹 Bernhard Naoki Hedenborg

オーストリアザルツブルク出身。十二歳でモーツァルテウム管弦楽団との共演でソロデビュー。十三歳からハインツビシフの下で研鑽を積む。一九九三年「若い音楽家のための国際チェロコンクール」（伊）優勝、一九九五年「第二回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール」（仙台）銀メダル等。二〇〇三年バイエルン放送室内管弦楽団とのハイドンのチェロ協奏曲でウィーン楽友協会大ホールにデビュー。二〇〇七年にはアイゼナハ歌劇場（独）のソリスト・イン・レジデンスを務め、音楽総監督の阪哲朗と共に演奏を行った。ウィーン・トーンキュンスラー管弦楽団首席チェロ奏者を経て、二〇一二年にウィーン国立歌劇場管弦楽団に入団。二〇一四年よりウィーンフィルハーモニー管弦楽団の正団員となる。二〇〇六年より神戸国際芸術祭の音楽顧問を務める。

〈競合と向上心〉

国際的なコンクールを主催されている財団からの原稿依頼なので、この機会に私のコンクールに対する想いや考えを述べてみたいと思います。音楽家がキャリアを積む上で、コンクールでの受賞歴はとても重視されています。プロフィールに「第〇回〇〇コンクール〇位」と書かれ、その数が多ければ多いほど、また順位が高ければ高いほど評価が上がることは周知の事実ですよね。音楽家としての立場から、結果として表記されるそれらの文字の裏側にある意味について述べるにあたり、「競合」と「向上心」という二つのキーワードを挙げてみます。

私自身もこれまで数多くの「競合」の場に身を置いてきました。まだ十歳に満たない時から州、国、国際レベルのチェロ・コンクールにて、他の若きチェリストと共にチェロという楽器におけるその時の自分の最高の芸と技を求めて試練の場を越えてきました。また、オーケストラの一員となるためにも、他の素晴らしいチェリスト達と、その一つのポストをめぐってオーディションに挑んできました。

© Katsuhiro ICHIKAWA

「演奏技量を高めたい」という個々人の中にある欲求は、日々の練習を積むためのモチベーションとして重要です。しかしそれだけでは自らの「向上心」を維持するのは困難です。数週間、数ヶ月、数年かけてようやく身につく技量は練習の中ではなかなか進展がわかりません。演奏会やコンクールという舞台のみ、積み重ねてきた幾多の試練が通じるかがわかる時です。更に、コンクールというものは、他人と競り合い、技量を比較する中で自分の立ち位置、いわゆるポジションを見極める機会だと思います。自分を見つめ直すチャンスとも言えるのではないでしょうか。またそれにより芸術の発展を推し進め、私たちが一歩先に進むための原動力になると考えます。

楽器の演奏は頭脳と運動能力が完璧に組み合わさってはじめて可能になる能力です。音楽を深く理解し、感性のレベルで体験すると同時に、演奏家として活動していくためには最高レベルでの運動神経が必要とされます。単に能力としては人間の可能性の限界にチャレンジするものと理解しても良いかと思います。

〈異文化の衝突から生み出されるもの〉

室内楽の醍醐味は個々人の持つ個性のぶつかり合いが、楽器による掛け合いの中に見えることだと思います。「衝突」するだけでは、ただの喧嘩で終わってしまいますが、それが美しいハーモニーとなるためには、各楽器が孤立することなく、また埋没することなく存在することが重要です。それぞれの主張が強すぎてはギスギスしますし、弱ければつまらない。それぞれの奏者が主体性を持ち、表現したいことを明確に持って演奏に参加することにより、一緒に演奏する相手は「傾聴」の姿勢も必要とします。ここに音楽による「対話」が生まれるのです。ただ情報を交換し合うお喋り、いわゆる「会話」とは異なる点です。

私はウィーン国立歌劇場やウィーン・フィルの仕事としてオーケストラで演奏するだけでなく、同僚や兄弟、友人たちと室内楽の演奏活動も積極的に行っています。その中で一番長く続いてきたのは学生時代からの付き合いのある仲間と結成したピアノ四重奏団「アンサンブル・ラロ」の活動です。今年で十五年目を迎えます。このアンサンブルの面白さはメンバー全員が国籍を異にするところです。

© Ai HIRANO

アンサンブル・ラロ（神戸・塩屋の旧グッゲンハイム邸にて）

私自身はオーストリアを拠点としつつ、日本でも数多くの演奏機会がありますが、私以外のメンバーはルーマニア、ロシア、ラトヴィアにルーツを持ち、ドイツや英国を活動拠点としています。もちろん母国語も異にします。文化的な背景や思想、思考も異なる四人での演奏は、ウィーンという街で共に活動している同僚、同じ親から生まれて一緒に育ってきた兄弟との演奏とは異なる種類の「対話」が生まれます。正に「異なる文化が衝突する」中で、絶妙なバランスを保ちつつ、高みに昇っていく過程を、メンバー同士だけでなく、その演奏を聴いてくださるお客さんと共に楽しんできた十五年間でした。

個々人の価値観でそれぞれが高みを求め、一緒に成長してきた時間。純粋な伝統を守る美しさとはまた違った存在価値であると思っています。時の流れの中で他の共演者と共に、自分とは違った価値観、感覚、知識などを認め合いながら、自分だけが感覚的に掴める何かを信じて過ごしてきました。また、室内楽、オーケストラ、ソロ、教職等を経験する中で、様々な視点から音楽と音楽家の在り方を見つめ直し、自分を磨きながら歩んできた十五年でもあります。

固定観念を捨て、自分とは違った価値観や外からの視点を獲得することにより、自分の育ってきた文化や環境のいいところも悪いところもより強く見えてきます。これもまた自分を見つめ直すチャンスだと思います。

〈発展とは何か〉

ひと昔前の価値観では「新しいもの」は発展の象徴であり、「古いもの」は欠陥を持っている乗り越えるべき対象であったように思います。しかし、今は「新しいもの」も「古いもの」も、全てが同時に存在します。

そして今は、絶対的な科学や知識も五十年後、百年後には間違いを認めざるを得なくなるということを痛感し始めている時でもあります。宗教や政治に対する盲目的な信仰や信頼、絶対的な科学に対する信用を失ってしまった現在、私たちはできるだけ沢山の視点や価値観を通じて得た感覚的な体験に基づく知識や知性を求めているのではないでしょうか。換言すれば二百年以上続いてきた啓蒙思想の終盤にさしかかっているのだろうと思います。

芸術は時空を超えて存在し、蓄積された叡智を体験することのできるものです。一つの人生で全てを知り尽くすことは絶対に不可能です。また未来への可能性を無限に秘めていながら、一人の人間の可能性の限界をも見せつけられるのが現在の世の中です。そのような時代に、演奏家として音楽という芸術、特に室内楽という個々人の存在のバランスがとれた芸術を身近に体験すること、演奏会またはコンクールという場で、自分の立ち位置を確かめながら高みを求めて育っていくことは、大変価値あることだと私は強く信じています。そしてそれは演奏家のみならず、耳を傾けてくださるお客様と企画に関わる皆様にとっても「発展の場」になることと願っています。

グランプリ・コンサート2019
デュオ・プロコピエフ・ダフチャン（ロシア）

日本室内楽振興財団
フェスタ担当プロデューサー
柳　圭史

グランプリ・コンサートは、三年毎に開催される「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の優勝団体を毎年部門ごとに招いて日本各地を巡回するコンサートツアーです。

今年は、富山県高岡文化ホールでの高岡公演を皮切りに全国の計十会場での開催。九州の三公演のうち宮崎公演は「小林市文化会館小ホール」での初公演です。神奈川は昨年の葉山公演に代わって、横浜の「港南区民センターひまわりの郷」での初開催となりました。熊本公演は益城町文化会館が地震による改修工事がまだ続いている事もあり、昨年ご協力頂いた「益城町立広安西小学校」での開催です。

さて今年は、第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ優勝団体の三団体のトリをつとめる「デュオ・プロコピエフ・ダフチャン（ロシア）」の登場です。二人はロシアの民族楽器ドムラとバヤンによるアンサンブルです。第九回大阪国際室内楽フェスタでは、クラシック曲を中心に演奏し、聴衆による一般審査員の圧倒的な支持を受けて、見事メニューイン金賞を受賞しました。現在、彼らはノヴォシビルスクをはじめ、ロシア国内を中心に活動していますが、スウェーデンなどでもコンサートツアーを行っており、これから世界へ羽ばたいていくロシア期待の若手デュオです。

大阪国際室内楽フェスタでは、二〇〇二年開催の第四回大会で同じドムラとバヤンの楽器編成でメニューイン金賞を受賞したデュオがいました。「デュオ・ロマノフ・クガエスキー」。このデュオも彼らと同じように、ドムラとバヤンの為に編曲されたクラシックの名曲を演奏し、一般審査員の圧倒的な支持を得て優勝に輝いています。実はこの二人は今回演奏する「デュオ・プロコピエフ・ダフチャン」の恩師であり、優勝後はロシア国内はもとより世界各国で演奏活動を行うとともに、後進の育成にも尽力してきました。若いデュオはその結成時から師匠に大きな影響を受けており、今回の師弟優勝の陰には大阪で勝つ術も伝授されていたかもしれません。

大阪国際室内楽フェスタは、過去多くのロシアのアンサンブルがメニューイン金賞を受賞しています。私がグランプリ・コンサートを担当してからの十年間でも今回で三回目になりますが、それらのロシア民族楽器の演奏者に共通している事が一つあります。それは自国の楽器を使い、その楽器でクラシック曲を演奏する事を、とても大切にしているところです。今年のグランプリ・コンサートは、第九回フェスタでメニューイン金賞を受賞時のクラシック曲、それにロシア民謡を加えたプログラムとなっています。皆様にもなじみのある曲も予定されていますので、是非ご友人や知人、ご家族と一緒にグランプリ・コンサートを楽しんで頂ければ幸いです。全国の会場で演奏者共々、皆様を心よりお待ちしております。

■開催日程■

10月31日(木)	19:00	高岡	富山県高岡文化ホール
11月 2日(土)	14:00	鳥取	鳥取市文化ホール
11月 4日(月)	14:00	広島	庄原市民会館
11月 7日(木)	18:30	宮崎	小林市文化会館小ホール
11月 9日(土)	14:00	大分	くにさき総合文化センター アストホール
11月10日(日)	14:00	熊本	益城町立広安西小学校
11月11日(月)	19:00	大阪	いずみホール
11月13日(水)	11:30	三重	三重県文化会館大ホール
11月16日(土)	14:00	横浜	港南区民文化センター ひまわりの郷
11月17日(日)	14:00	東京	トッパンホール

■全国共通■

■主催/ 公益財団法人 日本室内楽振興財団
■協賛/ ダイワハウス
■助成/ 公益財団法人 ロームミュージック ファンデーション
■協力/ 野村證券株式会社
■後援/ ロシア文化フェスティバル2019 IN JAPAN

JCMF NEWS

2019（令和元）年度 第1回理事会

開催：2019年6月7日（金）　ホテルニューオータニ大阪

議事：平成30年度の事業報告並びに決算報告が審議され可決承認されました。続いて2019（令和元）年度定時評議員会の招集と議題についても可決承認されました。また菱田義和氏の事務局長選任についても可決承認され、代表理事選定についての報告が行われました。

2019（令和元）年度 定時評議員会

開催：2019年6月24日（月）　ホテルニューオータニ大阪

議事：評議員の互選で牧野明次評議員を議長に選出後、先の理事会で承認された平成30年度の事業報告並びに決算報告が可決承認されました。改選期にあたる評議員21名の選任及び別2名の評議員の選任について可決承認された後、理事2名及び監事1名の選任が可決承認されました。続いて事務局長承認及び代表理事選定について報告されました。

2019年6月27日（木）の2019（令和元）年度臨時理事会において伝川幹理事の代表理事選定が全ての理事及び監事の承認を得て可決されました。

会　長(代表理事)	森　　詳介（関西経済連合会）	
理事長(代表理事)	伝川　　幹（読売テレビ放送）	
常務理事	牧野　立太（日本室内楽振興財団）	
理　　事	今井　敏之（大阪ガス）	彌園　豊一（関西電力）
	山本　卓彦（サントリーホールディングス）	山中　　斉（住友生命保険）
	芝　　道雄（ダイキン工業）	森　　正伸（西日本旅客鉄道）
	福田　里香（パナソニック）	橋本　誠司（読売新聞大阪本社）
音楽理事	堤　　剛（チェリスト、サントリー芸術財団）	
監　　事	穂積　一郎（三井住友銀行）	吉田　　満（読売テレビ放送）
特別顧問	山口　寿一（読売新聞東京本社）	大久保　好男（日本テレビ放送網）

評　議　員　安藤　恭輔（アサヒビール）、牧野　明次（岩谷産業）、絹川　直（大林組）、稲垣　直（鹿島建設）、河村　達樹（きんでん）、後藤　俊行（清水建設）、西田　達矢（積水化学工業）、加賀田　健司（大成建設）、泉本　圭介（大和ハウス工業）、村川　洋一（竹中工務店）、大江　謙（電通）、関本　洋一郎（東芝インフラシステムズ）、炭谷　正樹（西日本電信電話）、河端　秀直（日建設計）、河内　克樹（日本電気）、細山　雅利（ニュー・オータニ）、林　兼生（野村證券）、堤　研二（ハウス食品グループ本社）、甲斐　啓生（非破壊検査）、髙橋　英也（三井住友信託銀行）、大橋　善光（読売テレビ放送）、武野　一起（読売新聞放送）　（敬称略、企業名50音順）

音楽評議員　梅本　俊和（大阪音楽大学）

事務局長　菱田　義和（日本室内楽振興財団）

2020（令和2）年度　助成金募集について

来年度交付の助成金は、9月1日に募集を開始し、10月31日（木）が応募の締め切りとなっております。

お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団事務局　電話／06-6947-2183　HP／http://www.jcmf.or.jp

公益財団法人 日本室内楽振興財団（JCMF）について

目　　的：室内楽の水準の向上・普及を図るために、国際的な室内楽コンクール開催とともに、室内楽演奏会の開催や各種活動に助成等を行い、もって我が国の芸術文化の発展と真の国際交流に寄与することを目的とします。

設　　立：1992年5月26日

主な活動：「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の開催（3年に1回）　室内楽の演奏会の開催
室内楽の演奏活動及び教育普及活動への助成　室内楽に関する調査研究
室内楽に関する広報（広報誌及びホームページ）　その他目的を達成するために必要な事業

映画のようなワンシーン・・・。
車のクラクションや行き交う人の話声、街の雑踏までも、まるでオーケストラの響きのよう。
心奪われる情景が、美しい演奏のように頭の中を駆け巡ります。

「新しい価値観や刺激にふれる、心の癒しを求めてお出かけしませんか？」

音楽は、世界共通のメッセージ。人々の心を通わせるコミュニケーション。
私たちJTBは、世界各地の魅力を発信し
あなたの『特別な旅』となるお手伝いをしています。

JTB 大阪第二事業部
〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8（MPR本町ビル7階）
TEL.06（6252）2711（代） FAX.06（6252）2790
担当：有野　良一

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社関西みらい銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱ＵＦＪ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
大樹生命保険株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社

野村證券株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

東洋紡株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
新日鐵住金株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社ＪＴＢ
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

ＫＤＤＩ株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
讀賣テレビ放送株式会社

（関連業種別50音順）

CONTENTS

インタビュー
第14回目を迎えた「大阪クラシック」。これからも参加する人々と共に成長していく。
出席者：大植英次・福山修 …… 1

音楽の学び舎　相愛大学
相愛大学音楽学部、相愛オーケストラの伝統
中谷満 …… 7

伝統あるコンクール・新しいコンクール ～ボルドーとハノイ～
渡辺和 …… 9

第13回バンフ国際弦楽四重奏コンクールレポート
大阪コンクール参加団体が1位をダブル受賞！
河井拓 …… 11

音楽文化の源
くにさき総合文化センター アストくにさき
松原知晃 …… 12

音楽随想
競合と向上心、発展とは何か？
ヘーデンボルク・直樹 …… 13

グランプリ・コンサート2019
デュオ・プロコピエフ・ダフチャン（ロシア）
柳圭史 …… 15

JCMF NEWS …… 16

日本室内楽振興財団支援企業 …… 17

あとがき

3年毎に開催される「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」は、来年5月で第10回大会を迎えます。これまでの参加者は、3部門でのべ384団体、1,393名を数えます。現在事務局には次回への参加を目指して、世界各国から多くの応募が寄せられています。これから行われる厳正な予備審査を経て、年明けには第10回の記念大会への参加団体が決定し、いよいよ春の室内楽の競演を迎えます。

奏

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団
〒540-8510 大阪市中央区城見1丁目3-50 読売テレビ本社ビル1階
TEL.(06) 6947-2183 FAX.(06) 6947-2198
URL http://www.jcmf.or.jp
Cover Design : Mié
*2019年9月1日より事務所を移転しました。
VOL.52 令和1年10月28日

公益財団法人 日本室内楽振興財団